

1

Living the LOTUS

2015
Special
Issue



Buddhism in Everyday Life

年頭法話

『地道な務めを』

立正佼成会 会長 庭野日鏡

三宝帰依を基本に、「テーマ」を持って菩薩道を歩む



新たな年を迎えました。会員の皆さまも、それぞれ心に期するところがおありのことと思います。

昨年は、大聖堂建立から五十周年という節目の年にあたり、大勢の皆さまが記念参拝にお出でになりました。大聖堂に込められた仏教の精神、開祖さまの願いをかみしめ、今まで以上に精進されている方が全国にたくさんおられ、大変こころづよく感じました。

私は、昨年を「大聖堂建立五十一年目の門出の年」と申しました。五十周年を期して、皆共に一歩前へ踏み出していこう、心新たに歩いていこうという気持ちを込めたものです。本会のご本尊が立像であるのは、そうした前向きで、行動力のある姿勢の象徴であり、開祖さまの願いそのものといえます。常に前進し、創造していけるよう、今年も精いっぱい精進してまいりたいものであります。

さて私は、「平成二十七年次の方針」を次のように提示いたしました。

昨年は、大聖堂建立五十一年目の門出の年として歩みを進めてまいりました。本年からは、三宝帰依を基本に、「テーマ」を持って布教に取り組みましょう。

現実には、つねに繁雑に陥りやすいものですから、い



つも大切なものごとに集中することが出来るように、工夫を凝らしていきたいものです。

私たちは、釈尊及び開祖さま・脇祖さまの慈しみ思いやる、人間本来のころ(明るく 優しく 温かく)を大切に、菩薩道(人道)を歩んでまいりましょう。

付記一

私たちは、東日本大震災及び種々の災害により、お亡くなりになった方々への慰霊・鎮魂の礼を忘れることなく尽くしましょう。

古典の言葉に「一年計画ならば穀物を植えるのがいい。十年計画ならば樹木を植えるのがいい。終身計画ならば人を育てるのに及ぶものがない」とあります。

この中には、今後の世界に思いを馳せる時、食料安保の問題、原発・環境問題など、種々、私たちの眼を開かせるものがあると思います。穀物・樹木を植える体験をすること、人材育成への取り組みをすることなど、個人レベル・支部レベル・教会レベル・教団レベルで、取捨選択して実践し、地域社会・国家・世界に貢

献いたしましょう。

これまでと大意は変わっておりません。ただ常に新鮮な気持ちで取り組んでいきたいという願いから、多少新たな内容を加えました。

「方針」の中心となるのは、『三宝帰依を基本に』『菩薩道(人道)を歩んでまいりましょう』ということであり

ます。本会は、平成二十年から、全会員へのご本尊勧請を推進し、取り組んでいます。この歴史的経緯により、仏教の三宝帰依の基本が成就されました。ご本尊の「仏」、釈尊の教えである「法」、善き友・サンガの「僧」という三宝(仏法僧)に帰依する基本形態の確立を通して、会員一人ひとりが、仏教徒の自覚を一層高め、精進していく——このことが根本であります。

そして、仏さまの願われている大調和の世界を、家庭・社会・国家・世界に実現できるよう菩薩道(人道)を歩んでいくことが、私たちに託された使命です。

その原動力が、釈尊及び開祖さま・脇祖さまの慈しみ思いやる、人間本来のころ(明るく 優しく 温かく)にほかなりません。

自分のなすべきことを明確にし、集中して取り組めるよう工夫を

こうしたことは、すでに会員の皆さまもご承知のことです。しかし、日々の生活は、実に慌ただしく過ぎて行きます。頭では分かっている、目の前の出来事に、ふりまわされているうちに、何となしに一日が終わってしまうこともありがちです。

その意味から私は、「方針」の中で、『「テーマ」を持って布教に取り組みましょう』と申し上げました。

テーマという言葉は、主題、願い、目標、志など多様な意味合いで使われています。要は、自分のなすべきこと、進む方向を明確にすることといえます。例えば、「あの人に幸せになって欲しい」と願い、真心で触れ合っていくことは、テーマを持って生きる一つの手本です。

各教会にも、地域性や実情を踏まえた独自のテーマ、スローガンがあります。個々の会員にも、信仰の上でのテーマがあります。さらに国民の一人として、地域社会の一員として、職場ならば社員として、家庭では親として、夫、妻、あるいは子供としてのテーマも考えられるでしょう。

とりわけ私たち仏教徒には、いわば「仏を真似て、慈悲の心を持った人間になる」という最も大事にすべ

きテーマがあります。そのことを自覚すると、今後どのように務め、精進をしていけばいいのか、いま何をすべきかが、自ずと導き出されてきます。テーマを持つことは、人生を有意義に、確かな意図を持って生きることにつながるのです。

さらに「方針」では、『現実には、つねに繁雑に陥りやすいものですから、いつも大切なものごとに集中することが出来るように、工夫を凝らしていきたいものです』と申しました。工夫とは、一般的に、良い方法や手段を見つけようとするのですが、もともと「仏道修行に専念する」という仏教的な意味があります。

私たちの日常生活には、なすべきことがたくさんあります。趣味や娯楽などの関心事もあるでしょう。そして、あれもこれもと手を出した結果、すべてが中途半端に終わってしまうことも少なくありません。

省庁の「省」という字には、省く、省みるという二つの意味があるそうです。国家のような大きな組織になればなるほど、省く、省みることを大事にしないと、必ず繁雑になることから、「省」という字がつけられたということです。

もちろん、この世に全く無駄なものなどないのかも



しません。しかし、いま自分が優先して取り組むべきことは何かを考え、そこに集中するには、何かを省いていく決断も時には必要になります。

また私たちは、多用な日々の中で、大事なことに心が向かなかつたり、つい忘れてしまつたりすることがあります。

私自身、そうなりがちですから、常に机の上の目につく場所に、いくつかの座右の銘を掲げてあります。

大事な言葉はメモをして、ファイルにするか、必要に応じて上着の内ポケットに入れておきます。「薫染」——よい香りが染み込んでいく——という言葉があるように、それを讀んだり、口に唱えたりすることで、自ずと心に染み透ってくるからです。

時間の使い方、取り組む方法など、自分の生活のあり方を今一度見つめ直し、それぞれが状況に応じた工夫を凝らしていきたいものです。

慈しみ思いやる、人間本来のころを大切に、地に足をつけて前進

さて本年は、戦後七十年の節目の年であります。いま日本では、戦後生まれの人が全体の四分之三を超え、ほぼ一億人に達しています。一方、戦争を体験された方々は、ご高齢となり、年々、お話を伺うことが難しくなっています。その意味からも、いま、戦争体験や平和への願いを聞かせて頂くことは、未来を創造していく上で非常に大切であります。

人間は、いつの時代も、悲惨な争いを繰り返してきました。この瞬間にも世界の各地で戦火が上がっています。日本は、平和憲法により七十年にわたって平和を享受してきましたが、それが永遠に続く保証はありません。

古代中国の『易経』に「治に居て乱を忘れず」との言葉があります。どんなに平和な世にあっても、常に乱世のことを忘れてはならないと諭しています。それは、単に戦争に備えなさいということではなく、決して平和への地道な務めを怠ってはならないという意

味合いです。

また儒教の『大学』に、「修身齐家治国平天下」という一節があります。心を正し、身を修めることが、家庭を斉え、国を治め、世界を平和にすることにつながるということです。本会に当てはめるならば、三宝帰依を基本に、慈しみ思いやる、人間本来のころ(明るく 優しく 温かく)を大切にして、菩薩道(人道)を歩んでいくことが、家庭・社会・国家・世界の平和に直結するということでもあります。

大事なのは、このことを一人ひとりが、自身の「テーマ」として、より具体的に、そこに極力集中していく工夫を続けることであらう。

お互いさま、「大聖堂建立五十一年目の門出の年」に踏み出した歩みを、今年一年、地に足をつけて前進させてまいりたいものであります。

『佼成新聞』平成27年1月4日号より

